

「阪神タイガース 4位指名」

# 茨木秀俊

IBARAGI HIDETOSHI

## 語り合おう。 あの時の気持ち、

「エース対談」

## これからの思い。

新潟県の高校野球界を盛り上げた2人の投手が、共に今年のドラフトで指名され、プロ野球の世界に身を投じる。千葉ロッテマリーンズ3位指名の日本文理高校・田中晴也、阪神タイガース4位指名の帝京長岡高校・茨木秀俊。語り継がれるであろう今夏の新潟大会決勝における心の内、そしてこれから始まるプロ野球人生に対するあふれる思いを語り尽くした。

「千葉ロッテマリーンズ 3位指名」

# 田中晴也

TANAKA HARUYA



[巻頭特集] 高校バスケットボール

常識なんて誰が言った。  
限界なんて誰が決めた。

世界で一つだけを知りたい。  
想像以上の自分を見たい。

さあ、飛びだそう。  
もっと先へ、もっと高く。

—スタンダード新潟編集部

Road to a glorious future

高みへ翔る。



帝京長岡 104-54 新潟商業

久保田敦也、藤田純太朗ら新潟商は2年生が躍動したものの、帝京長岡の堅守を崩せず。

撮影●伊平裕哉(スタジオ橋田)



開志国際 131-77 北越

北越は開志国際の高い個人技に対してダブルチームや速い展開で対抗したが…。

撮影●伊平裕哉(スタジオ橋田)



帝京長岡 120-38 北越

開始から猛攻を仕掛けた帝京長岡。第1Qで43点を奪い勝負を決めた。

撮影●伊平裕哉(スタジオ橋田)



開志国際 124-61 新潟商業

開志国際は4つのクォーター(Q)全てに30点以上を挙げて新潟商を圧倒した。

撮影●伊平裕哉(スタジオ橋田)



男子 決勝リーグ 11月6日 長岡市市民体育館

北越	86	21-18 19-16 24-14 22-31	79	新潟商業
----	----	----------------------------------	----	------

試合終盤、北越・桑原利が連続得点を決めて突き放した



# 北越が粘る新潟商を突き放し 2年連続で全国へ

2敗同士の対決となった、北越と新潟商業。ウィンターカップへ残された最後の切符は、後半に守備から流れをつかみ、新潟商の反撃を振り切った北越が、2年連続でつかみ取った。

撮影●嶋田健二(スタジオ橋田) 文●大橋聖介(新潟日報社記者部)

ウィンターカップ県予選会  
高みへ翔る。

## 北

越は桑原利典の内外や青木汰斗(以上3年)の3ポイントなどで得点。

新潟商業は山際祐希(3年)を中心に応戦し、北越40-34新潟商で前半を折り返した。

試合が動いたのは第3クォーター(Q)。北越は青木が3点シュートを決め、リズムをつかんだ。敵陣から強度の高い守備を仕掛け、ミスを誘発。連続得点でリードを広げ、64-48で終えた。

新潟商も伝統校の意地を見せる。最終Q、長谷川颯(3年)、岸木理(2年)の3ポイントなどで点差を詰める。残り約3分。山際のゴール下で一時的に点差としたが、以降は北越が反撃を食い止め、桑原利の連続得点で突き放し、試合終了のブザーを聞いた。

\*

2年連続でウィンターカップに挑む北越。6月の北信越高校総合体育大会では、名門・北陸(福井)を破って3位に入るなど、着実に力を伸ばしている。

チームの中心は昨年から主力の3年生青木。切れ味鋭いドライブや精度の高い3点シュートで得点を量産する。昨年のウィンターカップでも、全国屈指の堅守を誇る福岡第一を相手に22得点、県予選会の新潟商



新潟商は山際を中心に粘り強く戦ったが、あと一歩及ばなかった

戦でも20得点を挙げた。他の3年生も攻撃力がある。新潟商戦、岡村翼は3ポイント3本を含む両軍最多の22点を挙げ、桑原利も要所でリングを射抜き21得点。3人で計63得点を積み上げ、チームを2年連続で冬の全国に導いた。

33年ぶりに出場した昨年は、初戦で高知中央から初勝利を挙げたが、2回戦で福岡第一に敗れた。悔しさを知る3年生が中心となり、県勢2強に負けない。北越旋風を巻き起こせるか。



2年連続で出場権を勝ち取り、歴史を刻んだ北越

日本文理 3  $\begin{matrix} 1-1 \\ 2-0 \end{matrix}$  1 新潟明訓

〔徳〕(日)曾根、山田、小林(新)後藤



「文理の名を全国に」  
心技体を充実させて優勝



5年ぶり2回目の全国選手権出場。前回のベスト8を超える結果が目標となる。



〔上-右〕トップで精力的に動き回りチームを鼓舞した主将の曾根。「全国へ出るために」埼玉から日本文理へ来た。〔上-左〕新潟明訓のエース友坂海空(2年)を抑え込む、日本文理守備陣の要・石澤。〔下〕トップ下でゲームを作った当時、日本文理の迫力ある攻撃をリードした。

2回のフィジカルDAYに導入した。着用のベスト(背中)からアンクルバンド(足首)までをゴムチューブで引っ張ることにより、全身(足底から背中まで)を同時に鍛え、走力やジャンプ力を飛躍的に向上させた。左タッチライン際で上下動を繰り返す小林は「瞬発力かなり伸びた。チームのハイプレス、最後まで落ちない運動量につながっている」と手応えを実感している。体の強さと足元の技術を兼ね備える選手をそろえたチームは組織的なパス交換からの崩しと、日本文理伝統の「縦に速いサッカー」を使い分けてベースを握る。2トップの曾根と杉本晴生、トップ下に入る塩崎(以上3年)のトライアングルは破壊力抜群。そこに左から小林がタイミング良く加わり、正確なクロスで攻撃に厚みを出す。けがで県大会を欠場した右MF大塚泰河(3年)も全国選手権には間に合う見込み。



【全国大会】2022年12月28日~23年1月9日 / 東京・国立競技場ほか、埼玉、神奈川、千葉会場

### 第101回 全国高校サッカー選手権大会 新潟県大会

決勝 / 11月13日 デンカビッグスワンスタジアム

日本文理が隙のない激しいサッカーで優勝した。「いい意味で図太い」(同校の大橋彰コーチ) チームは準決勝で帝京長岡の5連覇を阻んで勢いに乗り、決勝でも新潟明訓を押し切って5年ぶり2回目の全国選手権出場を決めた。

撮影 ● 嶋田健一(スタジオ嶋田) 文 ● 小林 忠(日刊スポーツ新聞)

優勝の瞬間、主将のMF曾根大輝(3年)はピッチに両膝を着き、大ききのけぞるように歓喜の雄叫びを上げた。「全国に行くために文理に来たのですごくうれい。最後に大きな目標を叶えることができた」。決勝戦は序盤、サイドチェンジパスを駆使した新潟明訓のサイド攻撃に押し込まれる。ただ、GK日隠レックス海斗(3年)を中心に落ち着いて対応すると前半10分、相手ゴールキックからのパスミスを見逃さなかった曾根が先制のネットを揺らす。19分後に右CKから同点とされて1-1で前半を折り返したが、後半立ち上がりから中盤の構成をダイヤモンド型からボックス型に変更して新潟明訓のサイドチェンジパスを遮断。守備からリズムを作ると、同13分にMF山田拓実(2年)がこぼれ球を押し込んで勝ち越し、同アディショナルタイムに左サイドバック小林倫太郎(3年)がダメ押し点を奪って勝負をつけた。

昨年の選手権県大会準決勝で帝京長岡に2点リードしながら逆転負けを喫した。その試合に2年生で出場していた曾根と塩崎温夫を中心に、現チームは「ボールへの執着心」をテーマに汗を流した。「悔しさは同じピッチ、大会でしか晴らせない。そこに向けて全員が本気になって取り組んだ」(大橋彰コーチ)。迎えた今大会準決勝。大会5連覇を狙った王者・帝京長岡を2-10で破りリベンジを果たした。

対人プレートの強度、攻守の切り替えの速さで他を圧倒し、今大会5試合で24得点2失点と安定した戦いを見せた。チームは昨年からの器具を使用する筋トレに加え、Jクラブやトップアスリートが愛用する「LEAP」というトレイニング器具を週に1、

